

# 特集にあたって

鈴木 正 美

新潟大学コアステーション「〈声〉とテキスト論教育研究センター」では、〈声〉に関する国際的かつ領域横断的な共同研究体制を整え、22名の構成員がさまざまな研究活動をしている。また、2019年度はセンター主催・共催による公演・講演を次のように開催した。

- (1) 2019年11月1日～11月10日、会場：ときめいと。「おと・ことば・いろ・かたち」展。新潟を拠点に活動する作家6名（阿部正広・亀倉芸・季村江里香・中川セツ子・深澤美枝子・本間恵子）による作品展示。会期中の11月3日、新潟の詩人たち（伊予部恭子、清水マサ、館路子、長澤忍）による朗読会を開催した。
- (2) 2020年1月17日、会場：ときめいと。アレクセイ・クルグロフ講演「ソ連とロシアにおける前衛ジャズの起源と発展；ロシア即興音楽のパフォーマンス性」。ロシアで今もっとも注目されているジャズ音楽家アレクセイ・クルグロフ氏をお招きし、ソ連邦崩壊以降の前衛音楽の歴史と現状について話をうかがった。セルゲイ・クリョーヒンをはじめとしてGTChトリオやグループ・アルハンゲリスク等が行った前衛的な音楽の実験が彼らの後の世代にどのように引き継がれているのか、また現在どのような音楽が実践されているのか、興味の尽きない内容であった。
- (3) 2019年3月8日、会場：ときめいと。シンポジウム「浅井十三郎の詩とその軌跡」。新潟在住の詩人・鈴木木一による基調講演「在東京時代から『詩と詩人』への歩み」の他に鈴木正美と藤石貴代による研究報告を行った。新型コロナウイルスの感染拡大をふまえ、関係者のみで開催した。詩人・浅井十三郎（1908-56）は新潟県北魚沼郡広瀬村（現魚沼市）にいながら、詩誌「詩と詩人」

「現代詩」を発刊したが、これら二つの詩誌は戦後日本の現代詩の拠点となっただけでなく、環東アジア地域やヨーロッパの詩人たちとの文学的ネットワークを築いたことは「人文科学研究」第144輯でもすでに紹介した。〈声〉とテキスト論教育研究センターでは、浅井十三郎再評価のためにも、研究をさらに進めていく。

今回の「人文科学研究」のプロジェクト特集に寄せられた論文は次の通りである。

齋藤陽一の「ロシア民謡とロシア演劇～ソ連ブームの中で～」は、日本におけるロシア民謡と演劇の受容の問題について考察している。第二次世界大戦後、日本においてそれまで触れることが難しかった国々の文化が様々に流入してきた。音楽ではアメリカのジャズを筆頭に、フランスのシャンソン、やがて中南米の音楽も入ってきたが、ソ連からはロシア民謡が多く取り入れられた。そうしたいわば「ソ連ブーム」の中で、ロシア演劇やスタニスラフスキー・システムも、同様に、そこまで内容を精査することなく、取り入れられていたという側面もある。一方で、ロシア民謡が政党の一定の支援も見られたうたごえ運動の中で歌われていたのに対し、歌声喫茶、歌声酒場などではそれと一線を画する立場の人々も見られた。そのことはまるで、演劇の場合に、スタニスラフスキー・システムがまだ政党色が強かった新劇との結び付きが強く、やがて小劇場運動が起こってきた際に、既存の政党とは異なる立場の人々が支持したという現象と似ているようである。そうした、1950年代、60年代におけるロシア・ソ連文化の受容の様相を明らかにしようとする試みである。

鈴木正美の「クラブとカフェの誕生——「雪どけ」期のジャズと大衆歌謡(3)」は、1960年代初頭のソ連に次々と登場したジャズ・クラブやカフェについて、その誕生から発展までを紹介している。1957年のスプートニクの成功と第6回世界青年学生フェスティバル開催以来、西側の資本主義諸国の文化よりもソ連の文化の方が優れているということを内外に示そうとする「文化の冷戦時代」が始まる。若者たちの文化的教養を高めようという気運が高まり、それをコムソモールが支援した。熱狂的なジャズ・ファン（中にはもちろんコムソモールもいた）の努力によって、1960年モスクワに最初のカフェ「マラジョージナエ」

がつくられた。ジャズの演奏を聞くことの出来るこうしたカフェが次々につくられ、ソ連独自の若者文化が如何に形成されたかを考察している。

鈴木孝庸の「一部平家のむかしいま」は自身の琵琶演奏の経験から「一部平家」を論じている。鈴木孝庸は、平家物語を平曲(平家琵琶)で物語順に全巻を語る「一部平家」を、平成27年(2015)11月から始め、一ヶ月二回ぐらい会を持ち、平成31年(2019)3月に、全66回で完結した。このことを報告しながら、室町時代の琵琶法師が行っていた「一部平家」について再検討した。往時の琵琶法師が、現代では想像できないような超長時間の演誦技藝を持っていたらしいことにも言及した。